

1. 白石島の地理・歴史

岡山県海域の西端、水島灘と備後灘・燧灘とを画する内海に、西北から南東の方向、約40度の角度に配列する、神島、高島、白石島、北木島、真鍋島、飛島、六島など大小20余の島嶼があり、笠岡諸島と呼ばれる。このうち、白石島は笠岡港から約12kmの沖合にあって、島のほとんどが国指定の名勝にもなっており、古来有名な風光明媚の地である。白石踊という盆踊の古い姿がよく保存されているのは、島民の努力に加えてこのような離島という地理的環境のなせる業でもあろう。

面積約2.9 km²、周囲約10km、かつては2,400人の人口を有したが、若年層を中心に離島が続き、1978年（昭和53年）現在の人口は1,300人余に止まる。1960、61年（昭和35、36）迄は、除虫菊の栽培と漁業が盛んであったが、前者は化学殺虫剤に押されて今や栽培農家は皆無に近い。後者も漁獲量の減少、若年層の流出に伴う労働力の不足や高齢化が著しいが、1965年（昭和40）頃から海苔を、1975年（昭和50）からは牡蠣を取入れて養殖漁業に活路を見出そうとしている。また、年間約4万人の海水浴客や釣り客が訪れるこの島にとって観光も重要な産業である。白石島はその名の如く全島花崗岩の露出層から成り、島の西海岸は北木島と並ぶ石材産地である。

ところで、笠岡諸島の開発の歴史は古く、各島はそれぞれ古い伝承をもっている。しかし、古来、瀬戸内海の主航路の要衝（風待ち、潮待ち港）として栄えた真鍋島、飛島の場合が若干の遺物等によって断片的に推測できる（大飛島からは奈良時代の遺跡が発見され、皇朝12銭等が出土。また西行の『山家集』には備讃瀬戸を通過した時に詠んだ歌、

真鍋より塩飽に通ふ商人は

つみをかひにて渡るなりけり

が取められている）を除けば、笠岡諸島の古代・中世史は茫洋たる闇の彼方にある。古い伝承と現在の島民との結びつきが認められるのも、真鍋島を除いては寧ろ近世以降のようである。



▲白石島から出土した直刀

白石島の場合、島内各所から縄文式、弥生式土器、^{いはい}斎瓮、骨角器等が夥しく出土するところから推測すれば、太古において相当の文化が営まれていたことは想像に難くない。

しかし、中世を通じて白石島は無人島化した時もあったと思われる。但し、地理上或は地形上から考えれば、この島も水島灘と備後灘・燧灘を画するところに位置し、内海潮流の出合うところであり、その^わ彎曲部は風待ち、潮待ちのための天然の良港ともなったであろうから、戦国時代に跳梁跋扈した海賊の拠点の一つであったと思われる。鬼ヶ城、隠れ里等の地名や30余ヶ所の海蝕洞の存在はかかる想像を逞うさせる。また、『^{きびつ}吉備津神社文書』（藤井駿、水野恭一郎編『岡山県古文集』第二輯、昭和30年刊所収）所収の、吉備津神社から真鍋島の真鍋氏に宛てた書状等に拠れば、戦国時代、真鍋氏一族が笠岡諸島を分領して君臨した様が窺われる。あるいは、その配下の人々若干が白石島にも居住したかもしれない。しかし、何れも推測の域を出るものではない。

笠岡諸島は慶長5年（1600）、幕府の^{びんちゅう}備中代官・小堀新助に没収され、元和元年（1619）以降は備後・備中において10万石を受領して備後福山に築城した水野勝成の領するところとなった。現住島民の歴史はこの時期に始まる。現島民の多くはこれ以後、備後から入植した人々の子孫である。『寛文印知集』に記載された水野氏受領の村名に神島、真鍋島が見え、白石島、北木島の名が漏れているのは当時、両島が無人島ないしはそれに近い状況であったことを傍証するものであろう。水野氏領5代80年間に笠岡地方の山野の開墾、干拓（白石島の新開など）が如何に進んだかは、元禄検地の結果、5万余石の余剰を生じたことを以ても知られる。この間に、白石島も漸く一村を成すに至った。元禄11年（1698）、水野氏改易となり、以後は倉敷代官所の支配地（天領）となった。1871年（明治5）からは^{こたけ}小田県の管轄となり、さらに1875年（明治8）には岡山県に編入されて小田郡白石村となった。1955年（昭和30）4月1日、笠岡諸島の他島とともに一括して笠岡市に合併され今日に至っている。

2. 白石踊の起源について

口承に拠れば、白石踊は源平・水島灘の合戦時、討死した人々の亡霊を供養する目的で創始されたという。取りあえず、この口承に関わる史実を示せば、凡そ次の如くである。

治承4年（1180）、信濃に兵を挙げた源義仲（木曾義仲）は、平氏を西海に走らせて京都に入った。寿永2年（1183）には、義仲の平氏追討軍は^{びぜん}備中に進入したが、同地方の平氏家人らの反撃にあって大きな痛手を蒙った。最も致命的な打撃であったのは、同年閏10月1日の備中・水島灘の海戦であった。矢田（足利）義清・海野行広ら義仲側の部将は兵船100艘で、平重衡・同通盛・同教経らの率いる平氏の兵船200余艘に戦いを挑んだ。しかし、瀬戸内海の豪族を組織した平氏の水軍に対して、海戦に不慣れた義仲勢は到底その敵たりえなかった。激闘凡そ5時間、義清・行広らは討死し、義仲勢は敗北を喫した。京都に遁走した義仲の戦力は見る影もなかった。

水島灘の合戦で圧勝した平氏は、京都奪回を図ったが、義仲を破った源範頼・義経と寿永3年（1184）2月、撰津・一谷に戦って敗れ、再び西走した。讃岐・屋島に本営を設けた平氏は同年12月、屋島の前哨線である備前・児島の^{たじ}藤戸で源氏の追討軍と干戈を交えて粉碎された。藤戸陥落後、源氏の優勢は愈々動かし難く、寿永4年（1185）2月には屋島が落ち、3月には長門・壇の浦で中国・九州の源軍と呼応した義経らによって平氏は族滅させられる。

前述の水島灘の合戦の際、白石島に上陸した源平双方の落武者がなおも死闘を続けるうちに火を放ち、全島悉く灰燼に帰したという。そのせいか、以来、島の古い歴史は杳として解らなくなったともいう。合戦の後、島の処々に怪異な現象が発生するので、戦死者の精霊を弔うために一基の供養塔(下の写真・土



▲富山の墓地内の供養塔



▲永護霊神

地の人の話によると、坪井清足氏は鎌倉初期のものといわれたというのが、風化甚しく時代の判定は困難である)を字富山の地に建立し、その怨霊を永護霊神として(開龍寺の境内)合祀した。それを回向(自分の修めた功德を他に回して、自他ともに仏果を成就しようと期する意で、仏事を営んで死者の冥福を祈ること)するためにこの踊りが創始されたといわれる。今もこの踊りを回向踊りと呼び、その踊り子を回向団と称するのはその名残りであるともいう。

神野力氏は「岡山白石島の盆踊り」(『祭りと芸能の旅』第5巻所収)で、空海・弘法大師の開山とする島の名刹・真言宗開龍寺が、水島灘の合戦時の死者の追善のために一宇を建立して弘法山慈眼寺と称したのが始まりともいわれている点に着目して「あるいは寺の縁起と合わせて考えるならば、源平合戦の亡霊供養起源説も「全く根も葉もない話ではなさそうである」と推考しているが、一般的には次の如く推測するのが穏当であろう。

即ち、岡長平氏はその著『岡山県の盆踊と民謡』で、この踊りを白石島とは指呼の間にある諷岐・塩飽本島に発生した念仏踊の変化したものとし、その音頭が口説(浄瑠璃、長唄等で曲の中心となり、最もしんみりとして振りも十分に見せ、唄をきかせる部分で恋慕・哀愁・懐旧などの感情を表す曲節。また、木遣・盆踊などに用いる民謡等で、叙事的な長編の歌をもいう。)体であるを以てヤンレ節(音楽を伴う口唱文学——歌謡の一つで幕末時代に替女が越後口説などと共に歌い広めた)に胚胎すると推察した。同氏は源平合戦の亡霊供養起源説を「よくある月並の由来説以外の何物でも」ないとして一蹴し、「徳川中期頃に舞踊の天才とも称すべき僧侶または篤信家がこの島に生まれるか、来るかして島人の教化休養の為にこの白石踊を創作し専ら奨励したのが起源だろう」と推考した。

さらに笠岡市教育委員会が編んだ『白石踊の資料』は、源平合戦の亡霊供養起源説は江戸時代末期に「好事家によって作為された説話であろう」と推測するとともに、岡氏の説を承けて、その「僧侶」に天和年間(1681-84)島に滞留した了海なる名僧あるいは開龍寺の第4世・了閑を以て擬定を試みた後、「これ程の踊りは農民や漁民の間に自然発生的に起り得るものとは考えられず、「或は此の辺に白石踊創造の鍵が秘められている」のかもしれない、と結んでいる。

「上方から少なからざる影響を受けている」と推量する三室清子氏は一方で、この踊りの運動表現に着目して、断定を避け乍らも「踊りの伝来経路を南方に求めたい」としている(『白石踊りの研究』岡山大学教育学部研究集録』19号 1965年刊、所収)。

何れにしても、根本的史料が何一つ見当たらないから(江戸初期、この島で大火があり、その際、島の近世以前の歴史を伝える資料は凡て失われたとの伝説もある)、以上の如き諸説の真偽の程は知る由もない。明らかなのは盆に招かれてくる祖霊を慰め、またこれを送り、生きている者に災厄をもたらす死霊や餓鬼仏を払い除けるための盆踊一般の性格を有しているということのみである。

白石踊の起源あるいはその伝来経路なりを考える際に注目しなければならないのは、同じ笠岡諸島の中の高島に高島踊が踊られていることである。高島踊はまだ世人に知られるに至っていないがその優美にして気品の高い踊は人の心を打たずにはおかないものがある。しかも、白石踊の一つときわめて近いもののように思われる。高島踊とあわせて考察することが今後の課題であろう。

3. 白石踊の演技時期・時間

白石踊には (1) 年中行事としての盆踊(供養踊)、(2) 海水浴客対象の観光・慰安踊、(3) 島外各地へ招かれて行うアトラクションとしての踊、(4) 早魁の年に行う雨乞い、雨喜びの祈願、感謝踊の4つがある。

(1) 盆踊は于蘭盆(旧暦7月13日～16日、現在は新暦8月13日～15日)の午後8時から同10時頃まで行われ、回向踊とも呼ばれる。上述の源平合戦の死霊回向とその後の各戦役で没した人々の英霊供養を兼ねる。旧暦で踊った昔時は海浜に櫓を組んで音頭台とし、これを巡って島内の老若男女が年に一度の歓楽として踊り抜いた。疲れると傍らの漁船に腰を下ろして休むといった風であった。月明が幻想的雰囲気醸し出して、年に一度この世に帰って来る祖霊を慰めるに相応しい行事であった。また、島内の初盆の家に故人の縁故者が集まって御看経(読経のこと)の後、庭に出て午後3時から同5時頃迄、供養のために各自得意の踊りを精魂をこめて踊る。さらに、かつては16日夜には婦人会、青年団共催で7つの集落が踊りの競演を試み、これを審査した。これは踊りの技術向上と島民の踊りに対する関心を高め、あわせて踊りの保存発展を期するためであった。その他、17日夜～18日を観音踊、20日夜～21日を大師踊、23日夜～24日を地藏踊、30日～8月1日を八朔踊として盆月の後半月中、島民は奉納踊りを行う(何れもかつては旧暦7月に、現在は新暦8月の同日に行う。)

(2) 海水浴客対象の踊りは白石島観光協会の要請を承けて白石踊り会が客の逗留期間中、毎土曜日午後8時から同10時頃迄、白石踊の宣伝を兼ねて行う。

(3) 島外の各種催しへ招かれて行う踊りは1928年(昭和3)山陽新聞社主催の民謡盆踊大会に出演したのを以て嚆矢とする。以来、俄に世人の注目する処となり、その後も上演の機会に恵まれて全国各地に招かれ、島外における活動は優に200回を上回る。

(4) 早魁時に行う雨乞い踊は最近では1962年(昭和37)9月及び1977年(昭和52)8月早魁時に行われた。(8月28日～9月3日の一週間祈念した)。

雨乞いは先ず島の大師様の境内で祈願し、満願の日迄(3～7日)島民は毎日一定の時刻に参詣して祈念する。満願の日には同境内で祈願の後、その場で踊りを行う。さらに同日、日没時には島の東北部にあって島民が聖地とする番屋の尾根(かつて参勤交代の大名船が往来する様を窺う目的で此処に見張人の詰所が置かれたことに由来。此処からは島から東西各々一日航程の距離にある下津井、柄の浦方面が望見できる。此処をやや下った所には磐境一神を祭るために岩石で囲んだ神域——がある)で柴燈(火を焚くこと)を行う。その後、雨乞いの効があった時は再び大師様の境内で雨喜びの踊りを行い、感謝の意を表わす。この島には古くから真言宗が普及しているため、これら祈念行事は仏式で行われる。

元来、岡山県は寡雨地域であるために古くから雨乞いの習俗が盛んで、中でも久米南町のバンバ踊、備中町の降雨踊、伯耆大山山麓・大山寺近傍の赤松の池への貰い水(大山信仰の一)等はよく知られている。その他、県南各地には雨乞いと関わる竜王山が50ヶ所もある。

4. 白石踊の種類と特徴

白石踊は島民の工夫で種類を増やして行ったものらしく、現存する踊りも微細な点になれば同一の踊りでも各踊り手それぞれ異なった所作をする。かつては旧盆の墓参を終えた各家では主に老人が子供達に踊りを教えたという。代表的な踊りの特徴を示せば、次の如くである。

(1) 男踊 主に男子の壮年、老年層が踊る。動作が活発で振りも大きく、空間を十分に使用する。踊りが高潮すれば尻絡げもするといった豪放、エネルギーな踊りである。老人が踊れば枯淡、洒脱な踊りになる。

(2) 女踊 主に中年以上の婦人が踊る。手首を極端に折り曲げ、一動作ごとに膝関節の屈伸を行うため、弾性に富み、所作の連続性の妙と優雅さを感じさせる。

(3) 娘踊 (月見踊) 新嫁や嫁入り前の若い婦人が踊る。終始、手の指を揃え、極端に手首を曲げて踊り、女性的な優しさを感じさせる。動きの抑揚はかなり大きく、肩から長い袖に流れる線を優美に生かした振りである。この踊り手が扇をもって踊る(4)扇踊 の場合は緩やかに回転する扇がなお一層の優美さ、艶やかさを添える。

(5) 奴踊 若衆(青年男子)が踊る。男踊、女踊、娘踊のように連続的、流動的な動作ではなく、個々の動作が各々明確に区切られており、素朴な男らしさを表現する振付である。竹の子笠を持つての(6)笠踊 の場合は大名行列の毛槍を振る供奴に似た動きで、快活且つ柔軟である。右手に振り翳す笠の動きは空間に大きく線を描き、踊りの輪全体にアクセントをつける程に印象の強い踊りである。

(7) 二ツ拍子 扇踊りに女踊りを組合せたもの。他の踊りの2倍に当たる12拍子を以て一回踊ることになる。

(8) 大師踊 鉦を撞木で叩き、腰を屈めて仏への礼拝を行う所作が含まれる。

(9) 阿亀踊 拍手した手を上に跳ね上げたり、足を上げて歩を前へ進める際、これに捻りを加える等、全体に動作が大きく、滑稽味が感じられる。

(10) 梵天踊 11~2歳迄の男児が踊る。ブラブラ踊が基本であるが、時々二人で組み、梵天(幣束)で切合いの所作(一方が切り掛かり、相方がこれを受ける)を行う。最初の、一歩飛んで踏出す動作などには茶目っ気が感じられる。

(11) ブラブラ踊 白石踊の基本形ともいえる踊りで動作が左程大きくない。長時間踊る場合はこの踊りの間に他の踊りを織り込んで身体の疲労を防ぐ。

この他に鉄砲踊、真影踊、があって、白石踊には都合13種類の踊りがある。